

氏名(本籍)	ひろ 瀬 幸 美 (福岡県)
学位の種類	博 士 (ヒューマン・ケア科学)
学位記番号	博 乙 第 1941 号
学位授与年月日	平成 15 年 6 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	先天性心疾患児の療育ニーズに基づく療育支援サービスの検討

主 査	筑波大学教授		柳 本 雄 次
副 査	筑波大学教授	博士 (医学)	大久保 一 郎
副 査	筑波大学教授	博士 (医学)	紙 屋 克 子
副 査	筑波大学助教授	博士 (医学)	竹 田 一 則

論 文 の 内 容 の 要 旨

近年の小児循環器治療における進歩は、先天性心疾患児の救命・延命を可能にした。それにともない、その生育過程で親子・家族関係、学校教育、健康管理等において多様な問題が生じている。それらの問題解決には、先天性心疾患児のライフステージを越えた、生活全般を包含した視点から総合的に療育ニーズを把握し、ニーズに基づいた支援サービスの実施が求められる。また、先天性心疾患児は、疾患の発症経過及び治療が個別的であり、その年齢や重症度によって支援が異なることから、個に応じた多職種による専門的なサービスが必要とされる。

そこで、本論文は、(1) 先天性心疾患児の療育ニーズを把握するために、母親と専門家を対象にした療育ニーズ尺度を参考にすること、(2) 尺度を用いて療育ニーズの特性を明らかにすること、(3) ニーズに基づいた療育支援サービスの試案を提言することを目的としている。

論文は、3部構成で、第1研究から第7研究から成っている。

第1部では先天性心疾患児の療育ニーズを把握する尺度を作成するために、母親の認知する療育ニーズと専門家のそれを調査した結果と先行研究に基づいて、療育ニーズの領域と項目の検討を行った。それについて専門家による内容的妥当性と因子分析による構成概念妥当性を検証し、内的整合性から信頼性を検討した。その結果、先天性心疾患児の療育ニーズの測定に適用可能な、「遊び・社会・文化活動」「疾病・医療・健康」「基本的生活・社会交流」「心理面」「学校生活」「疾病理解」の6領域、計30項目から成る尺度が作成された。

第2部では、作成した尺度を用いて、①母親の療育ニーズと②専門家からみた療育ニーズの特性を調査した。母親の療育ニーズは、先天性心疾患児の年齢(乳幼児期・学童期・思春期)及び重症度によりその特性を明らかにした。年齢による比較では、乳幼児期・学童期で「疾病・医療・健康」「基本的生活・社会交流」のニーズが高く、思春期では「心理面」が高かった。また、重症なほど全般的に療育ニーズが高く、多様化していた。

専門家のニーズは、医師・看護師・保健師・保育士・教諭の5職種間で比較し、特性を明らかにした。その結果、「疾病理解」と「疾病・医療・健康」のニーズが全職種を通じて高く、他のニーズも同様な傾向を

示したことから、職種間の差がみられなかった。

第3部では、①母親の必要とする療育支援サービスと②専門家が必要とする療育支援サービスの必要度を検討したうえで③療育支援サービスにおける専門家の職種別役割を明らかにしてサービス試案を作成し、事例で検証を行った。

①では、母親の療育ニーズと対応させた療育支援サービスの必要度を年齢ごとに重症度別に比較した。その結果、「疾病・医療・健康」の支援サービスの必要度が最も高かった。次いで、乳幼児期では「基本的生活・社会交流」、学童期・思春期では「学校生活」の支援サービスの必要性が高かった。②では専門家の療育支援サービスでも、5職種すべてで「疾病・医療・健康」の支援サービスの必要度が最も高かったが、「基本的生活・社会交流」では医師、看護師、教諭が高く、「学校生活」では保育士、教諭が高かった。③では、専門家の考える療育支援サービスの役割分担の意識が明確化された。事例の分析からは調整機能を果たすコーディネーターの必要性が示唆された。

審査の結果の要旨

本論文は、先天性心疾患児の療育ニーズを測定するため、対象の選定、項目の選択等の適正な手続きを行い、領域及び項目の設定には慎重に統計処理を行い客観性のある尺度を作成したこと、その尺度を用いて先天性心疾患児の療育ニーズを母親と専門家の立場から年齢及び重症度から特性を明らかにしたこと、さらに、療育ニーズに基づいた支援サービスの必要度から多職種の専門家によるチームアプローチによる試案を提言し、実証性を確認していることは、従前の研究で解明されない知見を提示しており、学術的かつ臨床的にも高く評価される。また、本研究の手法は、他の小児疾患の療育研究への適用の可能性を有する点で、この分野での開拓的な研究ともいえる。さらに、提示された療育モデルは、現代的課題である療育支援サービス体制のあり方に大きな示唆を与える点でも高く評価される。

一方、調査対象がきわめて限られる中で人数の確保に努力したことはうかがえるが、職種による偏り等は是正することが求められよう。また、先天性心疾患児の母親を3期の比較分析のために調査対象にしているが、思春期では本人からのニーズを把握する必要性を検討してみるべきであろう。さらに量的な分析が多く事例に基づく質的な観点からの考察が乏しい点など残された課題もあるが、未開拓の分野をかかえる水準まで高めた業績は優れていると認められる。

よって、著者は博士（ヒューマン・ケア科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。